

まほらに吹く風に乗って

<日本の美しい風景と歴史のプチディクショナリ>

地域に眠る埋もれた歴史シリーズ (3)

## 童女の松原伝説を求めて



ふるさと“風”の会

まほらに吹く風に乗って  
＜日本の美しい風景と歴史のプチディクショナリ＞

ふるさと風の文庫

地域に眠る埋もれた歴史シリーズ (3)  
童女の松原伝説を求めて

木村 進

ふるさと“風”の会

(はじめに)

常陸国風土記の鹿島郡のところに書かれている「童子女(うない)の松原」の男女の話を追いかけて見ました。

この松になってしまったという男女(那賀の寒田のいらつこ、海上の安是のいらつめ)を祀る手子后神社を巡ります。

ここから何かが見えるかもしれません。

古代鹿島郡の成立とかかわりがあったのでしょうか？

松の木になった男女の話からその裏を探ってみたくくなりました。

(目次)

(1) 童子女の松原(うないのまつばら)	.....	1
(2) 手子后神社(神栖市)	.....	11
(3) 手子后神社(石岡市)と中津川	.....	19
(4) 手子后神社(水戸市元石川町)	.....	26
(5) 手子后神社(水戸市田島町)	.....	32
(6) 手子后神社(城里町上坏)	.....	33
(7) 手子后神社と古墳(1)	.....	40
(8) 手子后神社と古墳(2)	.....	43
(9-1) 手子后神社と古墳(3)	.....	46
(9-2) 十二所神社(水戸市牛伏)	.....	50
(10) 手子后神社と古墳(4)	.....	53

## (1) 童子女の松原(うないのまつばら)

1300 年前に書かれた常陸国風土記の「香島郡 (かしまのこおり)」にこの地方の言い伝えとして次の話が出てくる。

-----

### ○ 童子女の松原

軽野の南に童子女の松原がある。

むかし、那賀の寒田のいらつこ、海上の安是のいらつめといふ、年若くして神に仕へてゐた少年と少女がゐた。

ともにみめ麗しく、村を越えて聞こえてくる評判に、いつしか二人はひそかな思ひを抱くやうになった。

年月が立ち、歌垣の集ひで二人は偶然出会ふ。

そのときいらつこが歌ふに、

いやぜるの 安是の小松に 木綿垂でて

吾を振り見ゆも 安是小島はも

(安是の小松に清らかな木綿を懸け垂らして、それを手草に舞ひながら、私に向かって振ってゐるのが見える。安是の小島の.....)

いらつめの答への歌に、

潮には 立たむといへど 汝夫の子が 八十島隠り 吾を見さ走り

(潮が島から寄せる浜辺に立ってゐようと言つてゐたのに、あなたは、八十島に隠れてゐる小島を見つけて、走り寄ってくる。)

ともに相語らんと、人目を避けて歌垣の庭から離れ、松の木の下で、手を合はせて膝を並らべ、押しへてゐた思ひを口にすると、これまで思ひ悩んだことも消え、ほほゑみの鮮かな感動がよみがへる。

玉の露の宿る梢に、爽やかな秋風が吹き抜け、そのかなたに望月が輝いて  
ゐる。

そこに聞こえる松風の歌。

鳴く鶴の浮州に帰るやうに、渡る雁の山に帰るやうに。

静かな山の岩陰に清水は湧き出で、静かな夜に霧はたちこめる。

近くの山の紅葉はすでに色づき始め、遠い海にはただ青き波の激しく磯に  
よせる音が聞こえるだけだ。

今宵の楽しみにまさるものはない。

ただ語りひの甘きにおぼれ、夜の更け行くのも忘れる。

突然、鶏が鳴き、犬が吠え、気がつくと朝焼けの中から日が差し込めて  
みた。

二人は、なすすべを知らず、人に見られることを恥ぢて、松の木となり果  
てたといふ。

いらつこの松を奈美松といひ、いらつめの松を古津松といふ。

その昔からのこの名は、今も同じである。

-----  
(口訳・常陸国風土記より)

茨城県の東南端、神栖市波崎の波崎海水浴場近くの松林の一角に「童子女  
の松原公園」という公園がある。

この公園は手前に大きな生涯学習センターがあり、その裏手の松林でした。  
公園の入口はこのセンターを横切っていきます。

「常陸国風土記 童子女(おとめ)の松原公園」と書かれています。

「童子女」は一般には「うない」と読むのですがここでは「おとめ」とフ  
リガナがふられています。

このように振り仮名をつけられるとこの常陸国風土記に書かれた内容も  
単なる美男美女の恋愛物語で終わってしまいそうです。



「うない」というのは少年少女の事と言われますが、髪の毛をうなじのあたりで束ねて下に垂らした髪型の事を言うともいわれます。  
この公園に造られている男女の像の姿とは少し違うのかもしれませんが。  
(神に仕える者です)

公園内はきれいに整備されていて、松林の中に常陸国風土記の各郡の説明プレートが 1 枚ずつ置かれており、読みながら常陸国の昔を思うことが出来るように作られています。

でも訪れた方はどんな思いで散策されるのでしょうか・・・。



風土記の話に書かれているように「歌垣」（嬬歌 かがい）の集まりで出会った二人が松の木陰で一夜を過ごし、朝になってしまったので恥ずかしくなり松の木になってしまったというので、この当時の予想される衣装を着た男女像が作られています。（私には少し違うように見えますが）

歌垣は筑波山が有名ですが、このような水辺などでもあちこちで行われていたようです。



「童子女（おとめ）の鐘」

説明板には

「この童子女の鐘は、いつまでも一緒にいたいという想いを抱き、松の姿に身をゆだねた男女の決して変わる事のない深い絆にちなんだ、永遠の愛を願う鐘です。時代の流れを表現したアーチから、現代に語り継がれている 2 人の出会いの場面をみつめながら、あなたも永遠の愛を願いこの鐘を響かせて下さい」とありました。

どんな音がするか軽く叩いてみました。

ゴオ～ン・・・ とても大きな音が鳴り響きました。

恥ずかしくなって松の木にでもなりたい気分です



さて、この公園は一度見ておけばそれでよしということにしましょう。何故この童子女（うない）松原の話が常陸国風土記に書かれているのでしょうか。どのような意味を持っているのか少し考えて見ました。

この風土記には筑波郡のところにも筑波山の歌垣について書かれていますし、風土記を書いたと言われる高橋虫麻呂の万葉集に載せられている歌にも春と秋の歌垣の様子が歌われています。

これによればこの日ばかりは人妻であっても交際自由?? という如何にもおらかな感じです。

筑波嶺に登りて嬬歌会(かがひ)をする日に作る歌一首

鷲の住む 筑波の山の 裳羽服津(もはきつ)の その津の上に 率(あども)ひて 娘子壮士(をとめをとこ)の 行き集ひ かがふ嬬歌に 人妻に  
我も交はらむ 我が妻に 人も言問へ この山を うしはく神の 昔より  
いさめぬわざぞ 今日のみは めぐしもな見そ 事も咎むな (9-1759)

さて、童子女(うない) 松原に出てくる男は「那賀の寒田」であり女は「海上の安是」で、共に神に仕える男女となっています。

少し興味深いですね。場所はどのあたりなのでしょう。

こんなことに興味を持つと、この男女の松原の話も、少し違った話に見えてきます。

この公園の場所は、常陸国風土記の香島郡のところに載せられた 1300年前に伝承として伝えられたおはなし「童子女(うない) 松原」の場所として推測した場所と思われます。

この歌垣(東国では嬬歌(かがい))の話として知られていますが、何かもう少し深い話が眠っていそうな気がします。

その伏線は同じ常陸国風土記の香島郡の冒頭に書かれています。

「昔、難波の長柄の豊前の大宮に天の下知ろし食しし天皇(孝徳天皇)の御世の、大化五年に、大乙上 中臣の?子、大乙下 中臣部兎子らが、惣領高向大夫に申し出て、下総の海上の国造の領内である軽野より南の一里(面積のこと)と、那賀の国造の領内である寒田より北の五里とを引き裂いて、この二つを合併し、新たに(香島の)神の郡を置いた。そこに鎮座する天つ大神の社(現、鹿島神宮)と、坂戸の社と、沼尾の社の三つをあはせて、香島の天の大神と称へた。ここから郡の名が付いた。」

(口訳・常陸国風土記より)

この香島（鹿島）郡は大化5年（649年）に下海上国より「軽野」という土地と仲（那賀）国より「寒田（さむた）」といわれる土地をそれぞれ供出して新しい郡（こおり）が置かれたとされています。常陸国風土記が書かれたのはそれより60年以上後です。



今では香島郡の北が何処までだったかははっきりしませんが Flood Mapsのソフト地図で海面を5mくらい高くしてみると北にあったと言う